

[活動報告]

漱石文庫等洋貴重図書修復事業報告

小川 知幸, 菊地 良直

はじめに

2018年度(平成30),朝日新聞文化財団の実施する「文化財保護活動助成」による支援をいただき,漱石文庫資料1点4冊,および貴重図書に指定しているマルクス著『資本論』ドイツ語初版(1867)の修復をおこなったので報告する。

当館所蔵の漱石文庫については,昨年度の事業報告中でも触れているので併せて参照されたい¹。

また,当館はマルクス関連のコレクションを多数有しているが²,今回修復対象とした『資本論』は当館が2種所蔵しているうちの一つである。より貴重性が高いと考えられるのは自筆献呈辞のある方だが,今回の修復対象はこれの無い方である。

本稿の執筆は,本論を小川が,「はじめに」と「おわりに」を菊地が担当した。

1. 悪夢の再来

2016年(平成28)11月22日午前5時59分,福島県沖を震源としたマグニチュード7.3の地震が発生した。最大震度は5弱。宮城県内では最大震度4であった(図1)。さらに午前8時4分には仙台港で144センチメートルの津波が観測された(津波観測点)。これは東日本大震災以降で初めての1メートルをこえる津波であった。しかし,のちの東北管区気象台による現地調査では,同地点で1.7メートル,石巻市小淵漁港では2.1メートルとの調査結果が報告された³。

東北大学附属図書館本館では,2003年(平成15)に起きた三陸南地震および宮城県北部地震(いずれも最大震度6弱)以来,古典資料の修復保存対策を推し進めており,またその後2005年(平成17)8月16日の宮城県沖地震(最大震度6弱)を経験したことから,

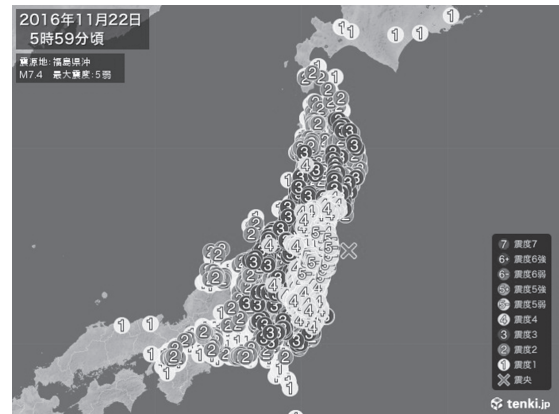


図1 2016年11月22日福島県沖地震における各地の震度分布⁴

とくに緊急性の高い資料として,夏目漱石の旧蔵書を中心とする漱石文庫にたいして具体的な修復処置を施し始めていた⁵。

漱石文庫の資料は2011年(平成23)3月11日の東日本大震災でもやはり被災したが,それでも,保存を前提とした修復を継続していたおかげで,それ以外の資料にくらべて被害の度合いは圧倒的に小さかった。

また,震災後の2011年度(平成23)に政府補正予算によって附属図書館本館では復旧・復興がすすみ,漱石文庫を含む多数の貴重資料を収蔵する2号館貴重書庫も全面的に改修された。面積も約2倍になり,扉や書棚には最新鋭の設備を使い,揺れによって自動的に落下防止バーがせり上がるようになった。天井および壁面の素材も,空調・防火設備も一新された。このようにして,地震その他の自然災害については,万全とはいわないまでも,想定しうる,また予算内で実行しうる範囲内での最大の対策が施されたと信じられていた。

1 菊地,大原理恵(2019),漱石文庫資料修復事業報告,東北大学附属図書館調査研究室年報,第6号,p.99-108.
2 久保誠二郎ほか(2003),東北大学附属図書館所蔵マルクス/エンゲルス貴重書閲覧システムについて,木這子,Vol.28, No.2,p.1-13.
3 気象庁,平成28年11月22日福島県沖の地震における津波警報

等の評価,<https://www.data.jma.go.jp/data/tsunami/benkyokai14/shiryu2-2>

4 Tenki.jpの過去の地震情報より。<https://earthquake.tenki.jp/bousai/earthquake/detail/2016/11/22/2016-11-22-05-59-58.html>

5 小川(2006),漱石文庫の保存修復,東北大学附属図書館報木這子,Vol.31, No.3 p.1-9.

その日は出勤後まもなく、貴重書係（当時の閲覧第二係）から、貴重書庫内の漱石文庫資料が地震により落下して破損したとの連絡を受けた。驚きと悲しみはいかばかりであったか。すぐさま駆けつけ、当時の福井ひとみ係長とともに書庫内の閲覧机で資料を確認し、破損の現況を調査した。

2. 破損資料

地震により落下した資料は5冊であった。内訳は漱石文庫の『センチュリー・ディクショナリー』（The Century Dictionary: an encyclopedic lexicon of the English language, London: The Times; New York: The Century, 1902）の4冊（Vol. 2, 3, 4, 7）とカール・マルクスの『資本論』（Karl Marx, Das Kapital: Kritik der politischen Oekonomie, Hamburg: Verlag von Otto Meissner, 1867, Bd. 1.）（ドイツ語初版）1冊である。

漱石文庫の『センチュリー・ディクショナリー』（以下『CD』）は、漱石山房の当時の写真にもその姿が収められている著名な資料である（図2）。10巻揃いで、一部の巻には「漾虚碧堂図書」の捺印がある。「漾虚」とは、漱石が熊本五高時代より使用し、1906年（明治39）刊の『漾虚集』にも使用された言葉である。したがって、ロンドン留学後の漱石がいかにして英文学等の研鑽を積もうとしたかを知るための重要な資料の一つでもある⁶。

資料の大きさは『CD』が縦27センチメートル、『資本論』は23センチメートルであり、前者は4つ折り（クアルト, Quarto）、後者は8つ折り（オクターヴォ, Octavo）である。いずれも大型というほどではない。なぜこれらの資料だけが落下したのか。それは現況調査によって徐々にあきらかになってきた。

ところで、『CD』には、背革のスレ（レッドロット化）や、表紙の角革とそこから連なる見返し紙および標題紙以降の数ページにわたって虫損があったり、アート紙のインク成分によるシミや一部に酸化による変色がみられたりしたものの、それらは経年劣化であり、資料が全体として安定的に保存されている限りは、とくに積極的に手を入れて修復すべきではないと考えられた。そのため、緊急度のさほど高くないものとして、



図2 漱石山房の蔵書。右手中央の飾り棚のなかに『センチュリー・ディクショナリー』が並んでいることがわかる（『漱石全集』付録「漱石写真帖」（2002年））

修復措置後にあつらえられる保存箱等には収められていなかった。かりに、対策をせずに保存箱に収めたりすれば、資料のコンディションが確認しづらくなるのと同時に、対策済みと誤認される危険もある。貴重図書は職員出納であり、適切に排架しさえすれば図書は良好に保存されるはずなのだ。

とはいえ、特別の外装がなかったことで、図書が落下の衝撃を直接受け止めることになったようであった。調査の結果、一部の背革に複数の打撃痕があり、うら表紙の下半分が背表紙から引き裂かれていた。落下によって振れて割れたようであった。これにより、一部の折丁の綴じが切れかけていた。また、別の巻には、下小口に割れが見つかり、その付近の折丁に引き千切られたようなかたちでの破損が見られた。さらに、ひらの上部には線状に革がそぎ取られたようなキズがあり、併せて、そぎ取りまではいっていないが、波打ったように擦れた痕跡があった（図3～7）。

こうした調査結果から、わたしは『CD』の落下のようすをつぎのように推定した。

同書は、地震の強い揺れによって落下防止バーが上がったものの、バーが図書の下部を押しとどめたことで、さらなる揺れにより、上部が前のめりになって半回転した。そのさい下小口側が、上の書棚の下部に当たって破損。揺さぶられつづけて、上の書棚につかえた表紙が背から引き裂かれ、これにより支えをなくして、そのまま頭から落下。着地のさいに、はずれかかっ

6 『センチュリー・ディクショナリー』を月賦で購入した当時の請求書が漱石文庫に残されている。書物の版年は1902年、請求書の日付は1906年（明治39）である。漱石は1903年の初

め頃にロンドン留学から帰国した。まもなく熊本の旧制五高を去り東京に戻ると、同年4月には東京帝大と旧制一高の英語講師の職に就いている。

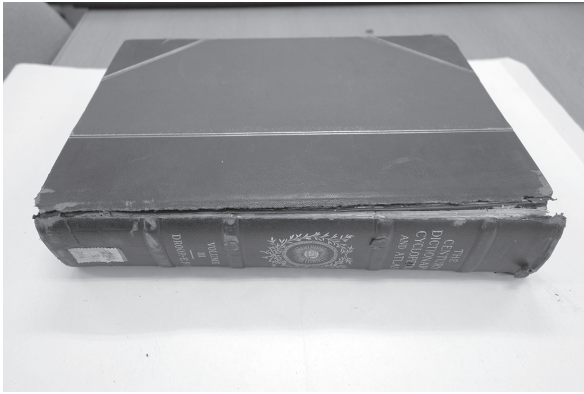


図3 背バンド上に真新しい打撃(擦過)痕がある 『CD』 Vol.3

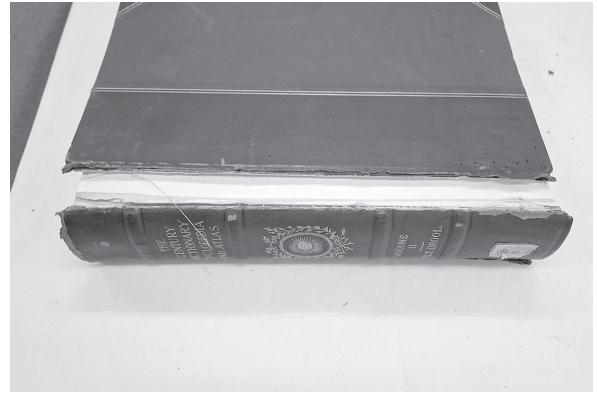


図6 表紙と見返し紙・本文折丁が破損し分離 『CD』 Vol.7

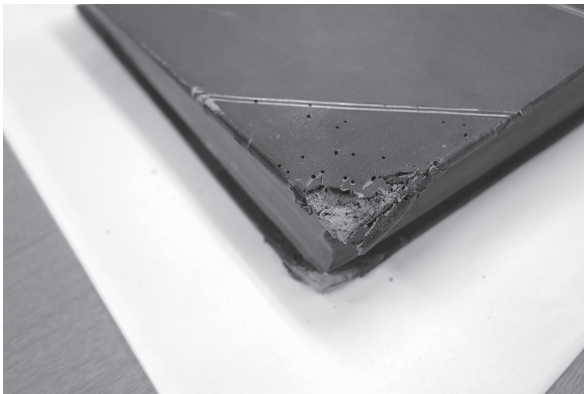


図4 角革の虫損とそれによる革の欠損 『CD』 Vol.4

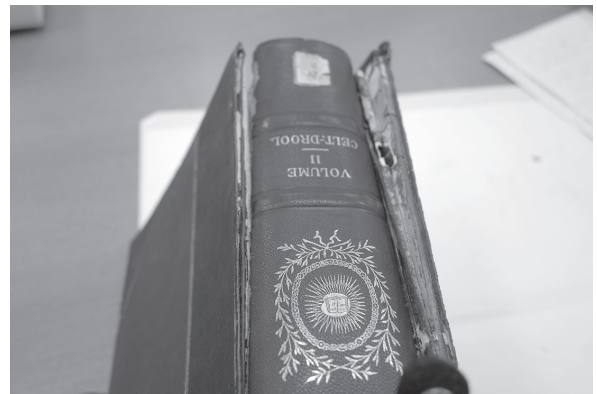


図7 表紙下部が振れて分離しかかっている 『CD』 Vol.2

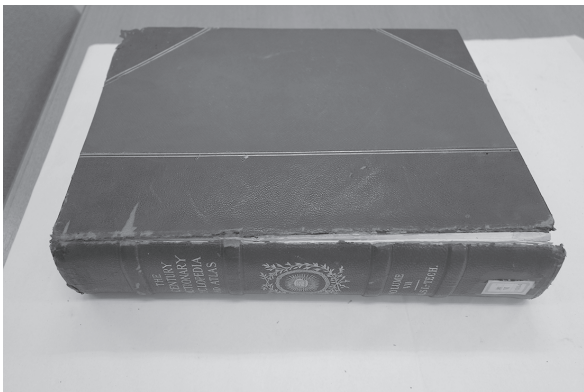


図5 ひらの革が線状にそぎ取られており、中央部に波うったような擦過痕 『CD』 Vol.4

た表紙が振れて、見返し紙とともに本文の折丁を引き千切り、また、虫損を受けて強度をうしなっていた角革の先端部がもぎ取られた、ということである。

上述のように『CD』は大型の資料ではなかったため、書棚の中段に排架されていたことも、この落下のメカニズムに関係したと考えられる。下段の大型資料はその重量ゆえに揺れに強く、上段の資料も小型軽量のため落下防止バーから飛び出すことはなかった。当然、地震の揺れの向きや加速度も考慮に入れねばならないが、一定の条件下ではバーは無力か、あるいは強いて言えば、不測の被害を招きかねないといえる。

いずれにせよ、落下した『CD』の4冊は、ホローバックだが背うらが膠でがっちり固められ、その接着剤が経年で硬化し、柔軟性をうしなっていたことも破損の遠因であるとおもわれた。そのようなクリティカル(致命的)な要素は、保存上できるだけ取りのぞいて

やらねばならない。また、『資本論』もこれとほとんど同様の破損状況であった。19世紀後半から20世紀初頭までの図書の構造が、ほぼ同一のものであったことも一因であろう。こちらの資料は角革が折れ、背が完全に外れ、折丁の一部が外れて飛びだしていた(図8, 9)。ちなみに、『資本論』の外れた折丁にかんしては、修復の過程で意外なことが判明するのだが、それは後述することにして、まずは漱石文庫の資料である『CD』の修復の方針について説明しておきたい。



図8 背が分離した『資本論』

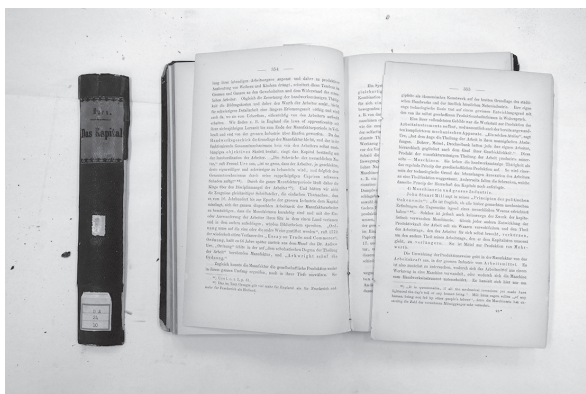


図9 『資本論』355ページの部分で折丁の一部が飛びだしていた

3. 漱石文庫の保存修復

漱石文庫の資料について、かつてわたしは「漱石が生前にもちいていた蔵書の状態にまで回復する」という基本方針を立て、それが附属図書館の貴重図書等委員会において承認され、現在にいたっている。以下、そのさいの論理を引用してみよう⁷。

通常、書籍の修復とは、まさしく出版時(オリジナル)の状態を回復することにほかならない。ヨーロッパでよく見かけるのは、装丁をすっかり新しいものに取り替えた古刊本である。書籍はもともと書冊のままで売られ、装丁を施すのはあくまで「個人の趣味」であった。

しかし、漱石文庫はたんなる個人蔵書の集積ではない。稀代の読書家(リーダー)であった漱石は、蔵書の4分の1以上に心おきなく書き込みをしている。閲覧のため来館する人びとは、稀覯書を期待しているわけではない。漱石の手にした痕跡のある蔵書を探しに来るのである。その意味で漱石旧蔵書は、一回きりの歴史的存在としての性格を帯びている。だからその処置は復元であってはならず、現状への介入は最小限にとどめ、保存できる部分はそのまま保存する。しかし処置しなければいずれ書籍自体の構造が破壊され、破損・散逸が危惧される部分については、つぎの約束事のもとに介入が許される。

わたしはこれを「保存修復」と呼んでいる。

- ①修復措置はあとで確認できるものとする
- ②書籍の構造を変えることはできるが、基本的な外観を変更することはできない
- ③修復前の状態に戻すことを前提に処置する

漱石が蔵書を「ボロボロに」したのならば、そのままであることを積極的に選択し、手を加えずに保存する。けれども、その原因が他にあるのならば、破損・劣化の(将来的)状態を構造そのものに介入しても取りのぞくよう努める。近年ダ・ヴィンチの壁画修復でも周知されるようになったが、これは予防的保存を含めた、文化財のための修復方法といってよい。

引用が長くなったが、13年前の論理でも基本的な考え方としてはいまも古びてないようにおもわれる。上記の壁画修復とは、1999年5月に完了した、ミラノのサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ修道院の「最後の晩餐」のことである。そこではダ・ヴィンチのオリジナルをあきらかにしようと、後世の修復や加筆のほとんどが取りのぞかれた。

しかし、漱石の生前の痕跡というものを確定するのは言うほど容易いことではない。資料の現状を見極め、それが将来に辿る道と、過去歩んできた道を、可能な限り証拠と論拠にもとづいて想像力を働かせなければならぬ。困難である理由の一端を、ふたたび引用により示したい⁸。

漱石旧蔵書が仙台に移送され、移管手続き（登録）が完了したのが1944年（昭和19）2月。これをもって当館の漱石文庫の成立とするが、このとき1916年（大正5）12月の漱石没後からじつに28年が経過していた。……なぜ漱石の旧蔵書はかくも長く放置されたのだろうか。小宮豊隆は、「せめて蔵書だけでも先にどうにかしたい。しかし是を今、例へば何箇所かの図書館に寄附し、一纏めに漱石文庫として、人人が読めるやうにしてもらふ事が出来るとしても、さうして蔵書を取り去つたら、先生の書齋は齒の抜けたやうなものになつてしまふだろう」……と述懐している（「漱石二十三回忌」）。漱石の高弟・小宮にとっては漱石の住んだ家を丸ごと保存しなければ保存したことにはならなかったのである。

ところが、九日会（漱石の毎月の命日に山房に集まる門人たちの会）では意見もまとまらず、財源に心当たりもなかった。鏡子夫人は松岡譲（漱石門下で、長女筆子と結婚していた）の勧めもあり、すでに1923年（大正12）11月に山房を九日会に譲渡することを申し出ていた。関東大震災による被災がきっかけになつたらしい。しかし、二度の集まりでも議論に収集がつかないことについて夫人が激怒した。

松岡がこう書いている。

「とうとう義母が堪らなくなって怒り出した。『山房百年のため、いつまでも一夏目が私蔵しているより、一番因縁の深い皆さんに貰ってもらい、一等よい保存の方法を講じて頂いたがよいと松岡がしきりにい

うので、私も家族も賛成して、こんどこうやってお集まりを願ったのです。しかし、いくら集まって二日にわたって議論して頂いても、四の五の文句ばかりおっしゃっていて、一向晝（けり）がつかないじゃありませんか。そんな事なら、いつそ私が案を引っ込めたらよいでしょう。二日間で皆さんの肚（はら）がよめた以上、私の方から勝手ながら撤回させて貰います。皆さん、お忙しいところをどうも有難うございました。……』」（「ああ漱石山房」）。

……その間、蔵書は芥川龍之介の「漱石山房の冬」（大正12年）でも知られるように、当時の早稲田南町の板敷き・畳敷きの各十畳二間の遺室にそのまま残されていた。「天井は張り換へなかったのかな」と、芥川は旧友のMに訊ねている。（太平洋戦争の）戦局の悪化にともなうて、後に屋敷は空き家となり、1938年（昭和13）、小宮は「家番を置いて閉めきつてあるために、風通しが悪く、鼠が暴れ、本が傷んでしやうがない」と嘆いている。

以上が漱石文庫成立前の旧蔵書のおかれた環境であった。さらに、成立後の状況も引用しておこう。

文庫成立後は片平本館（現在の東北大学史料館）の一階にケーブル文庫とともに収められており（小宮「漱石文庫」）、その後、中2階（2階への階段の上部空間を利用した3階）に移動して、「所狭しの裸電球（数個の40～60W）の環境下にあり」、「利用可能な保存状態ではなかったような感じ」であった、という（石垣久四郎氏談）。このとき片平本館は数十年来の旧造りの建物に増築も許されず、蔵書の重みで床はたわみ、書庫はどこもはち切れる寸前であった（「資料」『図書館通信』No.2,1964）。

1973年（昭和48）、川内地区に現在の本館が開館すると、漱石文庫はその地下書庫に移された。地上の天候に左右されにくい、安定した保存環境が提供できると信じられたからである。地下におかれたこの部屋（別置書庫）は、今ではマイクロフィッシュなどの保管庫になっている。それからさらにおよそ20年して1990年（平成2）、本館裏手に2号館が開館すると、4階に貴重書庫がおかれることになり、漱石文庫を初めとする貴重資料はふたたびそちらに移された。

8 小川（2006）上掲論文。表記を一部改めた。なお、自筆資料等

を含めた文庫全体の成立は1950年（昭和25）とされる。

要するに、旧蔵書は漱石山房においても東北大学附属図書館においても、決して良好とは言えない環境を移転しつづけたのである。さらに戦時下においては疎開もしている（これについては当時の図書館員を最大に称賛すべきであろう。これにより多くの蔵書が守られた）。漱石文庫になってからは補修や改装もされており、保存修復の考え方に留意されるようになったのは、平成に入ってもしばらく経ってからであった。その最初の事例を報告したのは小川(2006)である⁹。そこでは次のように記している。

また、表紙の鼠が齧ったと思われる損傷は残す方向で対処した。笑話話のようではあるが、これが『吾輩は猫である』の鼠の跡ではないかと、修復方針をめぐってわたしは真剣に議論したのである。漱石の書齋には鼠が棲んでいた。生前の痕跡だと疑いを拭いきれなかったためである¹⁰。

4. 修復方針とその後の経緯

さて、落下した『CD』にかんしても、わたしはこのように記述した。「従前よりの漱石文庫保存修復法に従う」（外観を極力保存し、構造のみを補強する）。いったん表紙と背を剥がし、折丁を綴じ直す。背革は剥がれた革を接着して埋め戻し、保革油を塗布。表紙と背革は和紙等で接着し、現状に近い色で彩色。角革の折れを修復し、虫損を埋めて彩色。本文支持体の虫損、割れも同様に和紙等で修復。標題紙等の酸化の著しい部分には脱酸処理。全体をクリーニング。背の構造はもともとホローバックなので、これを踏襲しながら、クータを付加」（「仕様書（破損状況および修復方針）」2016年11月）¹¹。

もちろん、この方針による処置をすべて実施しなければならないというわけではなく、利用状況や頻度、処置する時点での資料の状態に応じて、たとえば保革油の塗布や脱酸処理はしないでおくとか、構造上、本文支持体の虫損の埋め戻しはしなくとも保存に問題は発生しにくいだろう、とかいう判断はありうる。資料に手を入れることにはつねに慎重でありたいというの

が基本である。また、実務的には予算や他の資料との兼ね合いで、優先順位をつけざるをえないこともあるだろう。さらに、じっさいに修復を施すのは図書館員やわたしのような研究者ではなく、専門業者であり、図書館側の要望と技術的な可能性をすりあわせる作業が通常は延々と続くことになる。したがって、業者には無理難題と映り、大半の大学図書館では、そのような対策の必要なしと判断するのである。

幸か不幸か、上記の要求を満たす業者はわが国においてごく少数であり、東北大学附属図書館では、株式会社 Conservation for Identity (CFID, 旧アトリエ・ズキ) がこれに応えるべく、2005年(平成17)から奮闘中であり、幸いであるのは、少数であるがゆえに漱石文庫等の洋書修復のノウハウやスキルが確実に蓄積されている、ということである。

貴重書係ではさっそく同社に出張見積もりを請求し、総額60万円という概算であった。1冊あたり10万円前後を高いとみるか安いとみるかは資料や館によりけりであろう。ただし、これを惜しめば、少なくとも『CD』が人前に姿を見せる可能性は今後いっさいなくなる。残念ながら館内予算に余裕はない。貴重書係では粘り強く助成金を申請しつづけた。

2017年(平成29)には夏目漱石生誕150周年特別展示として、仙台文学館と共催で「夏目漱石～その魅力と周辺の人々」を11月3日から14日まで、せんだいメディアテークにおいて開催した。このような事情で、そのなかに『CD』を出陳することはできなかったが、同年のうちに助成金の当否が判明すれば、獲得できた場合、不足分を館内予算で補いながらも2018年度(平成30)早々には修復処置を開始する手はずになっていた。そこでは展示も含めて、とくに村上康子・情報サービス課長(当時)にご尽力いただいたに違いない。わたしもこの件にかんして貴重書係と議論をつづける一方で、推薦書をしたためたりしていた。

漱石は49歳で病没したため、前年の2016年は没後100周年にあたっていた。2年連続での漱石記念の年にわれわれは一方では公開事業を推進し、他方では修復のために呻吟していたのである。だが、晴れて助成金

9 その後、関連する報告として、小川(2010a)、歴史資料のコンバージョン——漱石文庫の保存と修復について、東北大学総合学術博物館ニュースレター Omnividens [オムニヴィデンス], No. 36, さらに小川(2010b)、書物と音楽が交わるどころ musica e storia intrecciarsi in libro, [オムニヴィデンス], No.

37, さらに、小川(2012)、『種の起源』初版本の寄贈と保存修復、東北大学附属図書館調査研究室年報, No.1 などがある。

10 小川(2006) 上掲論文

11 各資料について破損状況と併せて個別に記述したが、代表的なもののみを挙げる。これは Vol.3 の記述である。

を獲得することができ、これを館内予算で補填して、2018年5月には、それまで慎重に保管されていた当該『CD』4冊と『資本論』1冊をCFIDに手渡し、以後半年間にわたる修復作業が開始されることになった。

5. 処置報告

2018年12月の暮れも押し詰まったころ、CFIDの飯島正行氏が納品のため来館された。わたしも検収に立ち会った。処置済み資料ごとに互いに質疑応答と議論をかわす貴重な瞬間であったが、それをいちいち再現すると煩瑣になるので、同時に納品された「保存修復処置報告書」の一部を以下に引用したい¹²。

処置前の状態調査として、

排架記号：漱 VI,1004 登録番号：洋甲 134769

タイトル：The Century Dictionary Vol.VII

出版年：1902年

出版地：London

製本 表紙：角革装とじつけ製本（ひらはクロス）

背：タイトバック

綴じ：かがり綴じ

見返し：マール紙、貼り見返し

本文紙：機械漉き紙、複数折丁

図版等：コート紙、ペラ丁

小口装飾：天金

花布：貼り花布

その他：なし

損傷／劣化状態：おもて表紙はーフタイトルまでが一緒に分離し、うら表紙ジョイントは脆弱化している。表紙の表装革には欠損や虫損、破損、摩耗、レッドロットが見られる。表裏の表紙ボード角（天側）は著しい虫損と層化が生じている。背革は部分的に背より剥離し、破損や摩耗、脆弱化も見られる。綴じの支持体はジョイント部分で切断されているが、綴じ糸は良好。花布の状態は良好。見返し紙には軽度の破損や虫損が見られる。本文紙にも軽度の破損や虫損、折れが見られる他、ーフタイトル、タイトルページを含めた前後のページに酸性劣化による茶変色が見られる。

これらはわたしの見立てと殆ど同じであったが、花布の状態にも触れているのは、これが装飾用の花布であることを確認して、綴じ直しのさいの綴じ糸との関係を明確化するためである。そして、ホローバックではなく、タイトバックであったとされていた。これはわたしの見誤りであった。背革が経年劣化と落下の衝撃で剥離・分離して、背に隙間のあったことと、このサイズの事典のページの開き具合を考えれば、タイトバックに仕立ててあるはずがないと思ひ込んだせいであった。

いずれにしても、資料をタイトバックに戻してしまうと、その強度はかえって、脆弱化した折丁や紙葉を破壊しかねない。構造上は、ホローバックに変更し、クータ（厚紙製で板バネのような役割をするもの）を背うらに挿入するのが適正である。もちろん、これは外観にはいっさい影響せず、後で除去することもできる。

さらに、保存修復処置工程を引用する。

- ①刷毛やワイピングクロスでドライクリーニング
- ②表装皮に HPC と保革油を塗布
- ③表紙ボード角を補正し、虫損埋め（紙粘土）後に欠損を修復（染厚口楮紙）
- ④背革を取り外し、背貼り・背固めを除去後に背の形状（丸み）を整える
- ⑤背固め用背貼り（中厚楮紙）
- ⑥見返し紙の虫損（染中厚楮紙）、破損（薄口楮紙、本美濃紙）の修復、折れ補強（薄口楮紙）
- ⑦本文紙の虫損（染薄口楮紙）、破損（薄口楮紙）の修復、折れ補強（メチルセルロース）
- ⑧取り外した花布をぬるま湯で洗浄してから貼り戻し
- ⑨クータ（厚口楮紙）の取り付け
- ⑩背表紙芯紙（AF プロテクト H）の取り付け
- ⑪背革に和紙ヒンジ（染厚口楮紙）を取り付け、芯紙（AF ハードボード 0.63）を貼り込む
- ⑫背革の再取り付け
- ⑬タイトルページ付近の脱酸性化処置（ブックキーパー法）
- ⑭ブックシューを製作して収納（中身の垂れ下がり防止）

以上である。HPCとは皮革の補強用・養生貼りのための接着剤のことであり、また、AFプロテクトHとAFハードボードは、酸性物質を中和する弱アルカリ性の厚紙である（商品名）。最後のブックシューとは、保存箱を製作し、そこに資料を収めたときに、本文支持体と表紙のチリの高さがことなることから、本文支持体が下がって綴じや背などに負担をかけないように支える、中敷きのようなものである。

同報告書の挿図として添えられた写真により、これらの工程の要点をしめす（図10～16）。

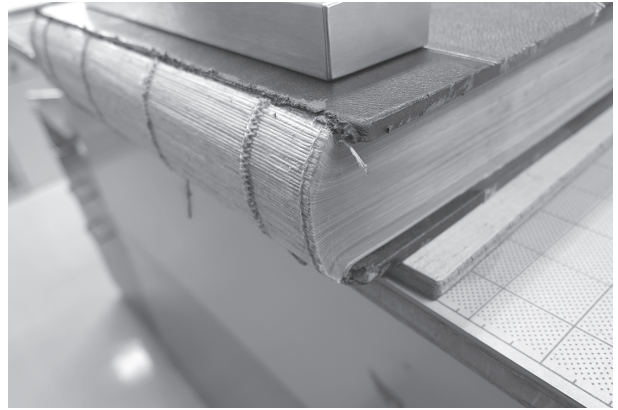


図12 背の形状を整える (Vol.3)



図10 表紙角の欠損修復 (Vol.7)

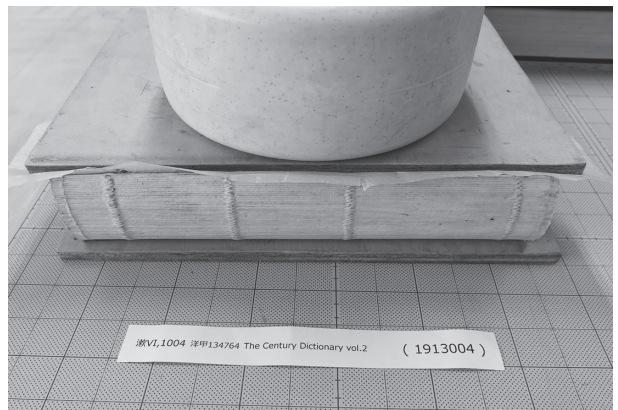


図13 背固め用背貼り (Vo.2)



図11 背貼り・背固め除去 (Vol.3)

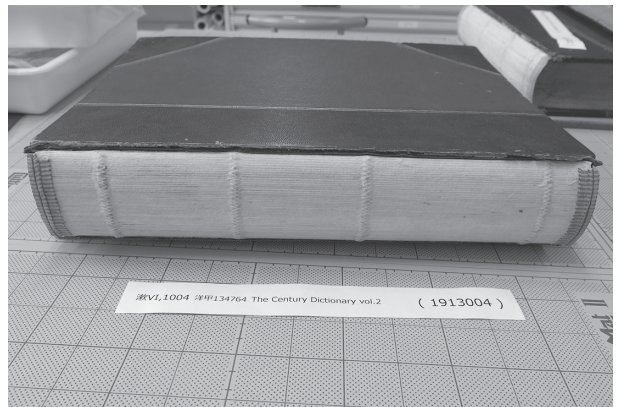


図14 花布の貼り戻し (Vol.2)

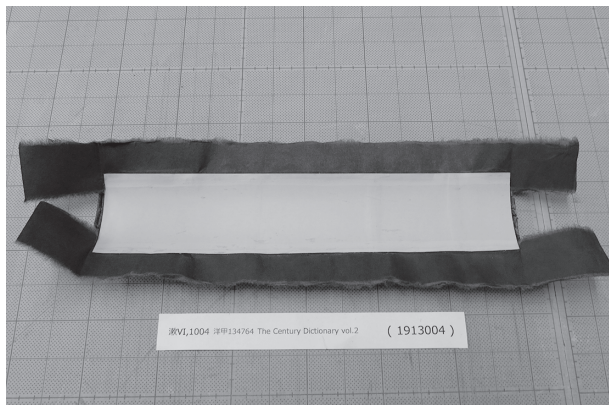


図15 背革に和紙ヒンジ取り付け (Vol.2)



図17 修復前 (Vol.2)

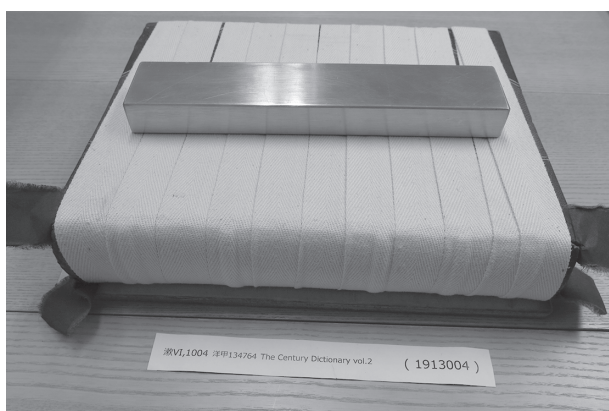


図16 背革の再取り付け (Vol.2)

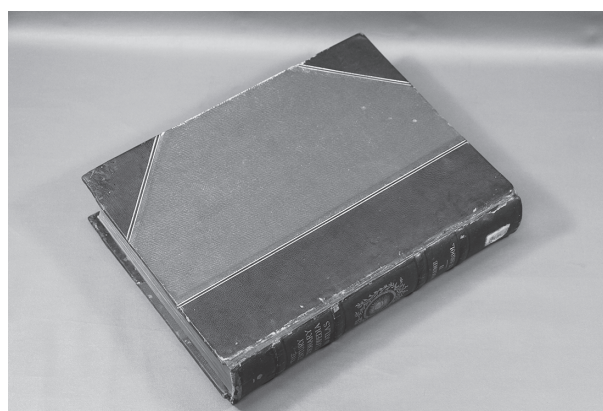


図18 修復後 (Vol.2)

つぎに、処置前の状態と処置後の状態を比較できるような写真を配しておきたい(図17, 18)。一見してどこが変わったのかわからずに驚かれるとおもう。これが東北大学附属図書館での保存修復のあり方なのである。仔細に見れば、角革の損耗が回復し、ひらの革や布の彩度がわずかに上がって、小口にみられるように折丁の揃い方が良好になっていることなどがわかるだろう。しかし、全体としては、漱石が使用したときから、それ相応に100年の時が積み重なったときに現れる状態がここに見られるはずである。

さて、『資本論』にかんしては、ここまで触れずにきた。わたしは仕様書につぎのように記載した。

『種の起源』のさいの修復方針に従う(歴史的風合いを残しながら、なるべく出版のさいの原型に近づけると同時に構造的に補強する)。「ザクセン産業通商局」をひとつの旧蔵者とする、マルクス『資本論』初版を1972年以降に本学が受け入れたものと推定される。所蔵者の痕跡の保存にとくにこだわる必要はないため、経年の風合いを残しながら出版時の原型を目標として修復する(後述する理由にも留意)。折丁を綴じ直し、背貼り等の古い部材を交換して表紙と接合。クータ付加。角革の復原。背上部の古い修復痕を除去。表紙の擦れ、退色ともに彩色等により修復。

この後述する理由とは、「本文支持体は酸性紙のため、すでに経年による劣化が著しい。過度の補強は本文支持体にたいする負荷を増すことにもなる。したがって、装丁についても意識的に経年の『緩み』を残すことで、物理的な負荷を軽減するとともに、利用者等がより慎重に取り扱うようにしたい」ということである。

『資本論』の修復には、『CD』の修復と同程度の技術が求められるが、オリジナルについての考え方がことなっている。「ザクセン産業通商局」の押印があるとはいえ、これはマルクスの旧蔵書などではない。目録上、全3巻の同一タイトルのうち、本学に第2巻・第3巻（第3巻はさらに2巻に分冊）が所蔵していたところに、欠けていた第1巻（本書）を後から補ったものである。したがって、押印などの痕跡は残してもよいが、不用意な修復跡は取りのぞき、出版時の原型に近づけることが好ましいと考えられた（図19）。

ただし、1867年刊の『資本論』を150年前の新刊の状態に戻すということではない。それは技術的には不可能ではないだろうが、しかしこれを新しい図書と誤認するようなことになれば、管理上・利用上の問題が生じかねない。緩みを意識的に残すという「面倒な」処置を要求したのはそのためである。

ところで、上述のように、この資料は背が分離し、折丁の一部が飛びだしていた。CFIDの調査でも「一部外れている折丁があるが、綴じ糸に切断がないため抜けたのか？綴じ忘れた？のかは不明」とあった（図20）。

だが、この飛びだしは、処置工程で折丁を綴じ直した後にも前小口から飛びだした状態であることがわかった。つまり、ことなるサイズで化粧断ちされていた、ということであろう。それが意味するのが、綴じが浅すぎて抜けたせいなのか、あるいは落丁を後から補おうとしたものなのかは、現状では不明と言うほかない。他にもさまざまな可能性が考えられるだろう。CFIDではこの飛びだしを保護するために、折丁を中性紙で包んで仕上げてくれていた（図21）。もし破損しなければ、そして修復工程に入らなければ、このような造りについては誰も気に留めなかつただろう。往時の出版工程の一端がうかがい知れる興味深い事例となった（図22, 23）。



図19 旧修理除去

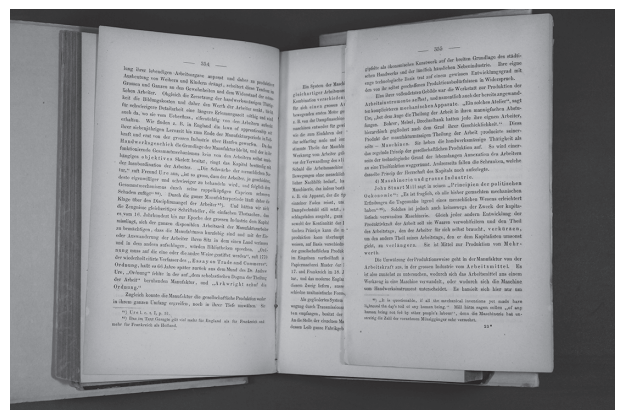


図20 外れた折丁

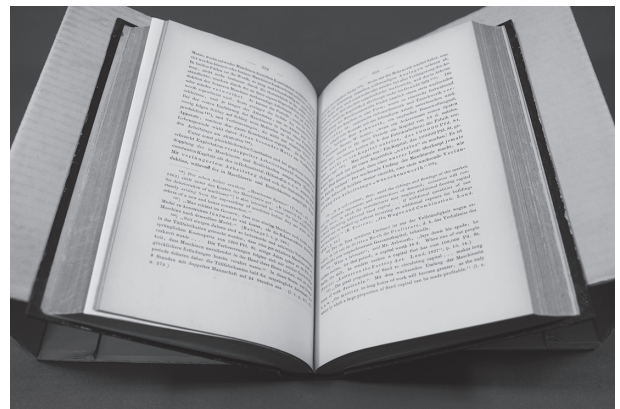


図21 折丁綴じ直し後の開いた状態（飛びだしを中性紙で保護）

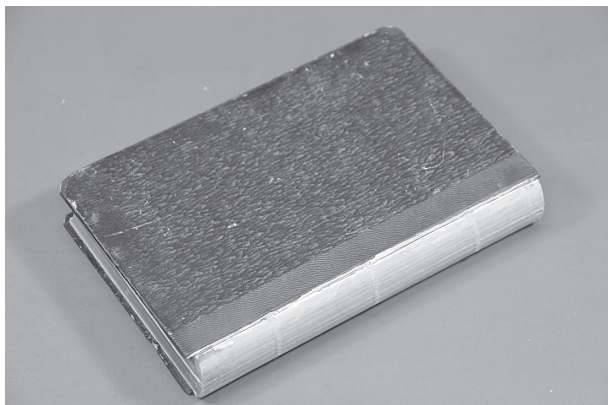


図 22 処置前



図 23 処置後

おわりに

このように朝日新聞文化財団の助成により修復された貴重な資料を広く一般に知っていただくため、2019年(平成31)2月3日から2月20日までのあいだ、附属図書館多目的室において公開展示をおこなった(図24)。

本展ではいくつかの工夫を試みた。前半では漱石の作家人生や代表作が概観できるパネルを用意し、そのもとに各時期の発表作品として『それから』『こころ』『道草』の初版本(複製・市販)を並べた。さらにそれぞれに新聞連載紙面(複製)、執筆原稿(複製・市販)の2種を追加し、この順に並べることで、出版に至るまでの生成過程をさかのぼって追えるものとした。

現代の私たちが漱石作品に触れるのは書店で売られている本や電子ブックによってであるが、代表作の多くは新聞連載が初出であった。このため、長い時間をかけて人目に触れ世相を映しながら作品が完結した点、当時の読書経験との違いであろう。今回の展示によって、漱石の小説が初めて読者の目に触れたときの姿と、原稿用紙のうえで作品が白紙から生まれる瞬間



図 24 修復展示のようす

に立ち会う感覚を楽しんでいただけたようにおもう。

後半が本展のメインとなるもので、修復前の資料写真と修復後の原資料を並べて比較できるように陳列した。各資料に対して、修復過程を解説した技術的な内容のパネルを用意しつつ、今回の資料を漱石が購入した際の請求書などもオリジナル資料として並べた。修復対象としてみたときには単なるモノとしての「本」であった存在が、漱石自身の手で購入され所有された特別なものであると再認識されるような流れを意識したつもりであったが、観覧者にはどう見えたであろうか。

このほか、生誕200年を迎えたマルクスの主著『資本論』初版の修復についても、パネルと修復前後比較というコンセプトで展示をおこなった。モノとしての修復対象としてみれば漱石文庫資料と共通な形態を備える一点だが、前章の通り漱石文庫とはことなる方針のもとに修復をおこなった点を注目していただけたらと考えている。

最後に、昨年に引き続き修復に立ち会った経験から簡単な感想を記して結びとしたい。

近年の貴重資料保存の考え方として繰り返しになるが、なるべく原資料に手を加えないこと、加える場合は可逆的な手入れにかぎることが推奨される。この視点でみたとき、昨年度におこなった和装本と、今年度におこなった洋装本では、若干事情がことなることに気づかされる。

和装本の場合は、元糸の除去や虫損箇所の部分分離、裏打ちなどはあるが、原資料の材質面から大きく組成を変える処置はなかった。基本的には四ツ目綴じや折本という書物の構造にも変更をくわえることはなかった。それに対して、今回の洋装本には、頁の脱酸処理

および革表皮への保革処置など、化学変化を伴う不可逆的な処理が施されている。またタイトバックをホローバックに修正するという物理構造の変更も加わった。

漱石文庫のオリジナル性を考えるとき、何をもってオリジナルとするかは、本論で現在の考え方が示されている。漱石生前の外観を重視し、その時点で劣化しているものはその通りに、そうでないものは推測し得る範囲で、外形と使用感の復元を試みるものであった。

したがって現在というより今後の視点になるが、特に電子媒体での代替利用という選択肢が一般化した昨今、新たな観点が浮上しているように思われる。すなわち、今回のように漱石が触れた本の組成や構造が入れ替わっても外観を残すか、または、外観が今回のように損なわれ破損していても漱石が触れた往時の材質や構造を保持するか、いずれかを迫られたとしたら、どちらが未来の漱石研究に資するものかと考えるのである。

書物の構造や材質の組成としてみたとき、たしかに自然劣化であっても、材質の変化が生じ、物理的な損壊により構造が崩壊する点は否めない。レッドロットといった革の変質、酸性紙劣化などはそのようなものである。

したがって程度の問題ではあるが、それにしても変化がその素材のもつ自然的推移の延長にあるといえる

ものか、もしくは自然的推移に反して加えられたものであるか、この点が書物のオリジナル性を考えるときに重要となる場面がさらに生じないかと、想像してしまうのである。

しかしながら、こうしたことは、ゼロか一かの単純な二元論ではなく、修復という「事業」の積み重ねのなかで追究され（妥協し）、深められていく課題であろう。その際、一点一点資料の特性と背景を判断し修復方針を決めていくという今回の方法論は、判断時点で基準に変化が起きたとしても、今後も普遍的なルールとして存続するのではないだろうか。

今回の修復事業では、このルールを再認識する貴重な機会となった。修復結果のうえでも、本学の姿勢を理解し、お付き合いいただいた良いパートナー（修復業者）を得て、最善の成果を上げることができたものと自負している。

謝辞 前貴重書係長福井ひとみ氏、前情報サービス課長村上康子氏、そして株式会社 Conservation for Identity の飯島正行氏他、今回の保存修復に携わったみなさまには記して謝意を表したい。

末筆ながら、本事業をご支援いただいた朝日新聞文化財団に、この場であらためてお礼申し上げます。

(おがわ ともゆき、学術資源研究公開センター
総合学術博物館助教、附属図書館協力研究員
きくち よしなお、附属図書館情報サービス課
貴重書係)